

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

山縣良和 ファッションデザイナー / 教育者
Yoshikazu Yamagata / Fashion Designer / Educator



CREATOR INTERVIEW

No

128

山縣良和 Yoshikazu Yamagata

1980年鳥取生まれ。2005年セントラル・セント・マーチンズ美術大学デザイン学科ウィメンズウェアコースを卒業。2007年4月自身のブランド「writtenafterwards(リトゥンアフターワーズ)」を設立。2015年日本人として初めて LVMH Prizeノミネート。デザイナーとしての活動のかたわら、ファッション表現の実験と学びの場として「coconogacco」を主宰。2019年The Business of Fashion が主催するBOF 500に選出。

No

128

山縣良和

ファッションデザイナー / 教育者

YOSHIKAZU YAMAGATA / Fashion Designer / Educator

クリエイターインタビュー

『職人と歴史へのリスペクトがある街づくり』

世界でも有数の技術力とクリエイションを地続きなものに。

published_2021.6.23 / photo_tada / text_akiko miyaura

ロンドンの名門校、セントラル・セント・マーチンズ美術大学在学中にジョン・ガリアーノのアシスタントを務め、首席で卒業。帰国後、若くしてブランド「writtenafterwards」を立ち上げた山縣良和さん。さらに、2008年には「こののがっこう」を設立し、間口の広い学びの場をつくりました。山縣さんが描いてきたのは、生きるためのファッションであり、着飾ることと自然が延長線上にあるのが当たり前。世の中のファッションという概念を超えた場所で、温度のあるクリエイションを続けている山縣さんが、人や社会、都市にもたらそうとしているものは——。そのヒントとなる現在国立新美術館で開催中(2021年9月6日まで)の『FASHION IN JAPAN 1945-2020 一 流行と社会』の展示のお話を起点に、今感じていること、未来のためにできることを伺いました。

人間と自然を切り離さないファッションサイクルが必要。

ファッションの世界は、1990年代から2010年代にかけて、ものすごいスピードで回転率が上がっていきました。グローバル化が進む中、大量生産、大量消費が当たり前になり、ファストに市場に届けていくという流れが顕著になっていった。結果、デザイン側も生産側も疲弊してきているというのが、近年の様相だと思います。

それがコロナ禍によって、今までのサイクルでは回らなくなってしまった。同時に、これまでの流れを見直すきっかけになったという側面もあります。" 人工的に作り出すファッションサイクル " だけでなく、" 人間と自然を含めた上での装いのサイクル " を見直していく必要がある。今、世界的にそういう空気になっているのかなと感じます。

現在、僕が参加している『FASHION IN JAPAN 1945-2020 流行と社会』のお話をいただいたのは、コロナ禍前でした。もともと「何か新しいものを見せられたらいいな」とぼんやりと考えてはいたのですが、コロナ禍を経て空気も変わった今、2021 年に展示するものとして「次の一步となるようなものを見せたい」という思いが強くなっていきました。



FASHION IN JAPAN 1945-2020 ー流行と社会

日本人が生み出した装いの文化や、その豊かな表現を生み出すきっかけとなった明治期以降の社会状況、流行といった現象を発端に日本のファッションを包括的に紹介する展覧会。戦中戦後の国民服やもんぺの時代から、国際的に華々しい活躍を見せた日本人デザイナーの作品、日本の若者から発信された Kawaii 文化、サステナブルな近未来まで、世界に誇る日本のファッションを社会的背景とともに紐解く。2021 年 9 月 6 日(月)まで、国立新美術館(企画展示室 1E)にて開催。
https://6mirai.tokyo-midtown.com/event/fashion_in_japan/index.html

着飾ることと自然に還ることが繋がる、ポジティブな循環を。

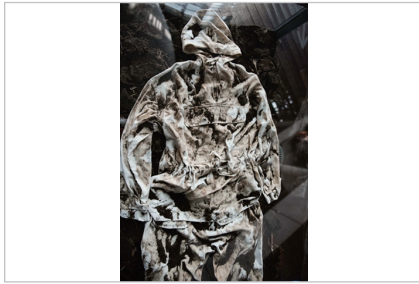
そんな矢先、展覧会のこけら落としとして開催された 3 月のイベントで、「FUMITO GANRYU」の丸龍さんとご一緒させてもらうことになったんです。国立新美術館内の空間を使って僕がインスタレーションを行い、同じ空間で「FUMITO GANRYU AW21 RUNWAY SHOW」を開催した「FUMITOGANRYU+Yoshikazu Yamagata (writtenafterwards) ショー」。

その時に、和紙でつくった衣類と土をガラスケースに入れて展示したのですが、『FASHION IN JAPAN 1945-2020 流行と社会』でも、衣服が土に還っていく様子を見せ、新たな衣服とファッションの役割を考えるプロジェクト《合掌》を行っています。



FUMITOGANRYU+Yoshikazu Yamagata (writtenafterwards) ショー

『Rakuten Fashion Week TOKYO』の関連イベントとして、FUMITOGANRYU と writtenafterwards で国立新美術館初となる合同ファッションショーを開催。山縣さんのインスタレーションが空間を彩る中、FUMITO GANRYU の 2021 年秋冬コレクションのランウェイショーを行った。その様子はオンライン配信され、モデルが手に持ったカメラの映像を映し出すなど、革新的なクリエイションとなった。



《合掌》

土と衣服がガラスケースの中に収められ、菌によって繊維が分解されて朽ちていく様子、やがて土に還っていく自然の循環をインスタレーションとして表現。山縣さんいわく「美術館の特性上、紫外線を積極的に入れることが難しく、菌の発生を抑えなくてはならない場所なので、紫外線に当てながら微生物を活性化させることで朽ちていく様子を見せることができません。菌がないガラスケースの中でどのような生態系がつけられるのか分からないですが、会期中に何かしら目に見える形で変化していくことを望んでいます」

和紙の布は、昔から日本で着られているものですが、ここ最近はかなりアップデートされています。研究も進んでいて、和紙は土に還るスピードが非常に早く、堆肥的な効果も抜群に高く、土を豊かにするということが分かってきたんです。近年ファッションの環境負荷に与える影響が大きな問題になっている中で、「着飾ること」と「自然に還ること」が繋がって、かつポジティブになることはないかなという思いで制作に取り組んでいます。この課題は非常に複雑なジレンマを抱えているので、方向性の答えは見えていませんし、答えがあるのかさえも分かりませんが手探りながらも進めようと思っています。

僕の作品だけでなく、この展覧会は日本のファッション史において、大きな大きな一歩だと感じます。考えてみると、これまで日本の戦後以降のファッションの歴史を俯瞰できる展覧会ってあまりなかったように思います。いちデザイナーの生い立ちであったり、時代時代の流行を紹介することはありましたが、今回はデザイナーではない方々が残した衣服が紹介されていたり、衣服以外の写真や映像から紐解いていたりもして。あらためて、日本はいろんな角度からの装いが多く生まれた場所なんだと僕も再確認できました。世界的にも影響を与えた、日本のファッションがどう変化してきたのかを、包括的に知れるという点が、この展覧会においてすごく重要だなと思います。

複雑化する社会で生きる人々を、ケアするファッション。

展示されているような歴史を経て、現代のファッションはどう変化しているのか。ソーシャルネットワークによって自己承認欲求が可視化された部分もあって、ある種のファッション的なものがすごく加速しているのは感じますし、新しい楽しみ方が生まれているのも実感します。そういう意味では、広く捉えた定義でのファッションへの興味は、すごくエネルギーがある。ただ、衣服だけを取り出すと、相対的に熱量は下がっているのかもしれませんが。でも、それは単純にファッションが衣服だけの表現媒体ではなくなっていて、意識の比重が変わったということなのかなと思います。



published_2021.6.23 / photo_tada / text_akiko miyaura

比重は変わろうとも、ファッションが自己表現や承認欲求的な部分に一番近いメディアではあることは、きっと変わらないと思うんですね。現代はパーソナルメディアを通じた表現の場が増えて自己が増幅し、様々な "私" が存在するようになっている。それによって社会構造が複雑化している中で、ファッションがそれぞれの環境に適応できるクリエイションやシステムをどうつくるか、というのは意識として大事だと思います。

例えば、複雑化した自己に対しての心と身体のケアに、もう少しフォーカスできる部分があるはず。ファッションって自己と他者のように、他の世界と向き合う間の役割を持ったもの。そういう意味では、心の悩みとか対人関係の問題と向き合う時に、改善する方法の一つがそこに隠れているように思うんです。

以前、自閉症の子どもたちと一緒にワークショップをやったことがあるんですよ。仮面をつくって別の自分になる、「変身ワークショップ」を行ったのですが、仮面をかぶった途端、ふだんとは違う子どもたちの性格や表情、言動が出てきたんです。そう考えると、衣服というのは一つ自己を切り替えるものになり得るもの。医療現場とかを含め、広く可能性を持っているんじゃないかなと感じます。



変身ワークショップ

福岡県糸島市で行われたワークショップ。子どもたちが変身したいものを画用紙に描き、大人のサポートも行いながら実際に仮面や纏えるものを制作するというもの。

ファッションは、人類が地球上に生まれてから、ずっと共にしているメディアであり、コミュニケーションツールです。ある種、人間の原点的な部分が垣間見られるものなので、表層的な部分も大事ですが、もっと本質的な部分での役割があるはずですし、それがこの先の未来もすごく大切になってくると思います。

身につけていた服が食べ物へ。発想の転換が未来を左右する？

その一つとして、短期型の大量生産、大量消費を前提とした社会構造を見直す必要があります。ここ数十年の過剰な動きでもあるので、何かしら改善を図るアクションはしていかないといけないですね。具体的な方法として、「少なく、長く着る」という一昔前では普通だった価値観の再考も大事だと思います。こういうことって気恥ずかしくなるくらい当たり前に言われてきた言葉になってしまっていますが、物を大事にすること、長く使うことが素敵だという事を言っても、偽善だなんだと嘲笑されない社会の空気が底辺にもっとあれば、少しずつ価値観が変わっていく部分ってあると思うんですね。そういう方向づけをするのは、ファッション業界に関わっていく人たちの責任や役割の一つかなと思っています。

あと、いまあるエネルギーをうまく変換すること。前に聞いて、面白いなと思った話があるんです。名前は忘れてしまったのですが コンピューターの世界で、ユーザーがアダルトコンテンツを見たいがために、ボタンを押しまくるという現象を逆手に取って、実験的なことをした人がいるそうで。欲求のためにボタンを押しまくるエネルギーを使って、解読が難しかったパスワードを突破する力にする、みたいな。知らず知らずのうちに、ユーザーの欲望や承認欲求が、相反すると思われるものが助けになるってすごいことですね。それこそ、発想の転換じゃないかと思っています。

それを衣服に置き換えると、自己承認欲求の一つとして着ていた衣服が、土に還すとキレイな花やおいしい野菜を育てる堆肥になる、お洒落をして街に出ると動物や植物が意図せず喜ぶ、自分の衣服は自分の細胞からつくられる、というような発想の転換なのかなと。古くから薬のことを「内服薬」、飲むことを「服薬」といいますよね。昔の人には、身体の外側に身につけるものと、内側に受け入れるものを繋げて考えていたと見える部分がある。その考え方を基にすると、外で着たものが、食べ物などに変換されて、最終的に自分の皮膚になるというような、自分の実感となるポジティブな循環システムがもう少しできるようになればと思います。

僕が衣服を通じてこれからやりたいと思っているのは、まさにそういった発想の転換やエネルギーの変換。装うことの愛おしさを表現していくと同時に、先に話した心のケアや身体上のケア・キュアとしての機能の可能性を探っていくことが大事だなと思っています。



published_2021.6.23 / photo_tada / text_akiko miyaura

当事者研究的に自己を探ると、社会問題が見えてくる。

僕がファッションの役割として、「心の治療」に大きな可能性を感じています。それはファッション表現の過程で当事者研究的に自己を掘り下げて考え、社会への問題意識を持ちながら表現していく部分です。主宰している「ここのがっこう」で最も大切にしているのもそこです。もちろん、ファッションにおけるクリエイションを学ぶのですが、最初に「そもそもファッションってなんだろう」という問いに向き合うことから始まります。やはり、ファッションクリエイションにとって、" 環境と自分 " というのは切り離せないもの。環境によって自分がつくられ、自覚的にも無自覚的にも影響を受けながらそれが自己の装いになっていく事を認識する一つまり、自分のルーツと向き合うことが表現に繋がると思うんです。



ここのがっこう

2008 年に山縣さんが開講した「世界と自分の装いの原点に向き合いながら、ファッションを学ぶがっこう」。学校名は、自分がいる場所である「ここ」と、ひとりひとりを指す「個々」を意味する。知識や技術だけでなく、クリエイションの原点となるような学びを大切にしている。

自分のルーツや歴史だったり、自分がつくられた環境だったりを知ること。それを自分だけでなく、他者に共有しながら共に考えていくことに重きを置いています。具体的に形にするために、「リサーチブック」というものをつくってもらうんですね。今自分が興味のあることでも、自分のルーツになっているものでも何でもいいので、ペタペタとスクラップ的に収集したり、絵を描いてみたり、文章を書いてみたり、とすごく自由なブックです。

僕がロンドンで通っていた学校でも、当たり前にはリサーチブックをつくっていませんでした。自分自身を研究するというより、もう少しプロジェクト寄りのものでしたが、自分を知るきっかけにはなりましたね。自分を知るということは、コンプレックスにも向き合うことも大切です。コンプレックスと向き合うと、その先でコンプレックスが生成された原因となる社会問題とぶつかることもあるんですよね。僕自身、昔はコミュニケーションがうまくできなかったですし、勉強もできる方ではありませんでした。自信が持てず、言ってしまえばバカにされ人生でした。でも、それがエネルギーになってきた部分はあります。そのリサーチブックが今後生きていく上での何らかの道標となっていけばいいなと思っています。

ローカルの歴史と向き合い、モノづくり、街づくりを考える。

「このがっこう」の拠点となる場所も、大事な部分です。以前から東京でモノづくりをするなら東側というのが、僕の中では重要なポイントの一つでした。現在学校は浅草橋にあるのですが、東京の東側はもともと職人の街でもあり、昔からモノづくりの歴史が根付いている場所です。日本に限らず、アジアには元々自国の文化があったけれど、第二次世界大戦以降、西洋化によって 180 度変わってしまうような価値観が投入されたという歴史があります。そんな歪みのある状況の中でモノづくりを考えていく時、日本人がもともと持っている価値観と歴史と現在を地続きで繋げて考える事ができる環境づくりが大切です。

ふだん、僕は上野や谷中近辺で過ごすことが多いのですが、あのあたりは空襲をあまり受けなかったのもあって、古い街並みが多く残っているんです。日常的に職人や歴史的建造物に触れ合えるというのがありますし、情緒を感じられる場所でもあります。あと、個人的に田舎の出身なので、田舎風味が残っている場所を探すクセがあるんですよ。前に出張で山梨県に行ったら谷中に戻ってきた時、若干田舎の情緒観と地続きの感覚が湧き上がりホッとしたのを覚えています。人によるとは思うんですが、僕の場合は心健やかに保つという意味でも、東側が合っているのかもしれない。

山縣良和 ファッションデザイナー / 教育者

YOSHIKAZU YAMAGATA / Fashion Designer / Educator



published_2021.6.23 / photo_tada / text_akiko miyaura

土地の記憶を、現在の風景に重ね合わせる。

東側にいることが多いので、今、展覧会の会場である国立新美術館のある六本木とかは、展示の準備以外だとなかなか最近に行く機会がなくて。でも、縁がないわけではないんです。僕のパーソナルな話でいうと、〈writtenafterwards〉を立ち上げて最初にプレゼンテーションをしたのが、21_21 DESIGN SIGHT で行われた『ヨーロッパで出会った新人たち』という展覧会でした。初めて自分のクリエイションを見せた思い出深い場所ですし、当時のように新人、大御所に限らず、新しいクリエイションがいつも見られる場所として機能し続けてほしいなという気持ちもあります。



ヨーロッパで出会った新人たち

2007年に『Japan Fashion Week in TOKYO』内の展覧会として21_21 DESIGN SIGHTで開催。ヨーロッパの有名校で学び、各国のファッションコンテストやイベントで出会った新人ファッションデザイナーたちのクリエイションが展示され、話題を集めた。山縣さんも、6ブランドの中の1ブランドとして参加、また現在バレンシアガのクリエイティブディレクターであるデムナ・ヴァゼリアも参加している。

街を舞台にモノづくりを考えた時、その場所の過去の歴史を紐解いて、今に繋げていくというのが僕の根本にはあります。例えば、ちょうど今『東京ビエンナーレ2020/2021』に向けて、『Small Mountain in Tokyo』というプロジェクトをやっているのですが、それも現在は神田明神になっている場所に、神田山という山があったという歴史から考えたもの。その昔、神田山を削って日比谷一帯を埋め立てたのですが、もう一度、神田山をつくらうというコンセプトで進めています。



Small Mountain in Tokyo

庭園美術館で開催された展覧会『装飾は流転する』(2017年)で行ったショー「After Wars」で"山を装う"衣装を発表した。今回の作品はその延長線上にある。山の見えない東京に、昔あった「神田山」をバーチャルで再現。作品を展示している『東京ビエンナーレ2020/2021』は2021年7月10日～9月5日まで、東京都心北東エリア(千代田区、中央区、文京区、台東区の4区にまたがるエリア)で開催予定。

もともと自分が山に囲まれた場所で育ってきたので、東京にも山があってほしいなという気持ちがあります。リアルに山を具現化するには、膨大な費用と作業が必要なので、まずはバーチャルで山をつくらう、ということになりました。スマートフォンをかざすと、僕がつくった山の模型が出現するのですが、「昔はこんな風景だったのかも」と味わってもらえる時間になればと思っています。それこそ、六本木は高低差のある土地も多いので、いろんな歴史があるはず。いろいろ調べたら、何か可能性が広がりそうですね。そうやって過去の歴史が結びつくような街づくりは、個人的にもとても興味があるところでもあります。また六本木は日本軍や米軍の拠点となる軍隊の街でもあったので、戦争と平和とファッションについて考える展覧会などを行ってみたいです。

地方の街に感じるポテンシャル。だからこそ、東京は何をするのか。

街づくりの話ともつながるのですが、最近、東京から少し離れた場所に行く機会がちょこちょこあるんです。「ここのがっこう」との協業で展覧会やモノづくりをしていることもあって、山梨県の富士吉田市とはご縁があるのですが、すごくポテンシャルを感じる街です。東京から2時間弱ほどの距離ですが、古い街ならではの情緒があって、素敵な建物が残っていたりするんですよ。築100年以上の建物を生かしてお店をしていたりして、場所の使い方が優雅。インターネット社会になったこともあって、ビジネス的にも地方の難しさが緩和されていてすごいと感じます。



クリエーションの分解展

庭山梨県富士吉田市にて開催された「ここのがっこう」2020年度受講生と織物職人による展覧会。富士吉田市は平安時代から織物の名産地として知られており、高い技術を有する職人やブランドが集積している。

街の中には小さな家族経営の職人さんがたくさんいて、そのコミュニティの中でお互い助け合っている。街おこしにも積極的で、外部からやって来る僕らや学生の受け入れ態勢も柔軟で、素敵な場所だなと感じます。そんな街に触れて、地方ならではのポテンシャルをすごく感じる今日このごろ。逆に、「じゃあ、東京は何をすべきか」というのも考えさせられます。

職人へのリスペクトと協業が未来のモノづくりを開いていくはず。

あと、日本って海外から見ても、素晴らしい職人さんが多くいる国なんですよね。職人なら先進国に分類される国の中では日本か、イタリアかと言われるほど、世界的な環境です。例えば、日本人は意外と知らないけれど、「CHANEL」なんかのラグジュアリーブランドの生地を日本で多くつくられています。世界トップクラスの技術と素材が目の前にある上に、いい意味で敷居が高くないので、いろんな人がリーチできる環境なんです。こういう環境って世界を探してもなかなかないですし、ものづくりにおいてとてもポテンシャルの高い国だと思います。

この環境を生かすために、一つ課題となるのが、これまでの効率化による弊害。効率を上げるために分野毎で分業しすぎたために、相互理解やコミュニケーションが生みづらくなってしまっている部分があると思います。例えば、フランスの「HERMES」は職人さんが中心にいて、そこにデザインチームも一緒にいるという感じで。ごはんを食べるのも、職人さんが最初らしいです。それくらい職人さんありきで、会社が成り立っています。その点、日本は職人さんが企画の外部にいたり、リスペクトが足りなかったりという部分があるので、そこが変わっていくといいなと思います。技術や環境はすでに高いポテンシャルがあるので、職人さんを大切に協業しながら職人さんありきのモノづくりをしていくことが大切。それが、未来に繋がっていくんじゃないかなと思います。

撮影場所：国立新美術館『FASHION IN JAPAN 1945-2020 ー流行と社会』（開催中～2021年9月6日まで）

取材を終えて

お話を聞きながら感じたのは、いい意味で、見ている視点がファッションデザイナーではないということ。もちろんエデュケーターとしての経験もあるからこそでしょうが、領域が壮大すぎてデザイナーと呼ぶには忍びなく、とても自由で深く柔軟な姿勢という、多くの教育者がなかなかたどり着けない場所にいる。地球まるごと、ひょっとしたら宇宙まるごと、包み込むような思考回路を持っているのではないかな。そう思うほど、大きな何かを感じる方でした。
(akiko miyaura)